

2008 年 1 月の東北地方の天候

【 1 月の特徴 】

- 少雪・少雨
- 中旬の低温

(1) 2008 年 1 月の概況

中旬は冬型の気圧配置が強まり、寒気が南下した。このため気温の低い日が多くなり、東北日本海側を中心に雪の日が多かった。その他の期間は冬型の気圧配置は長続きせず、低気圧や気圧の谷が短い周期で通過した。このため曇りや雪または雨の日が多かったが、日本海から北日本付近で発達した低気圧は少なく、本州南岸を通る低気圧もあまり発達せずに通過したため、降雪量・降水量は少なかった。

月平均気温は東北北部で低く、東北南部で平年並。月降水量は東北北部でかなり少なく、東北南部で少ない。月間日照時間は東北地方で少ない。降雪の深さの月合計平年比は、東北日本海側は 74% で少なく、東北太平洋側は 26% でかなり少ない。

(2) 各旬の天候経過

上旬: 期間のはじめには、東北地方の上空に強い寒気が入った影響により大雪となったところがあった。その後は、気圧の谷や低気圧が短い周期で通過し、東北日本海側を中心に曇りや雨または雪の日が多くなった。東北太平洋側では移動性高気圧におおわれて晴れの日もあった。

平均気温は東北北部で平年並、東北南部で高い。降水量は東北日本海側で平年並、東北太平洋側で少ない。日照時間は東北地方で平年並。

中旬: この期間は冬型の気圧配置となることが多く、東北日本海側を中心に曇りや雪の日が多かったが、東北太平洋側では沿岸部を中心に晴れの日もあった。12 日には低気圧が日本の南岸を通過したが、その後は冬型の気圧配置が続いて強い寒気が南下したため、気温の低い日が続いた。

平均気温は東北北部で低く、東北南部で平年並。降水量は東北北部で少なく、東北南部で平年並。日照時間は東北日本海側で少なく、東北太平洋側で平年並。

下旬: 冬型の気圧配置は長続きせず、日本海や日本の南岸を通過した低気圧の影響で曇りや雪または雨の日が多かった。期間のはじめと中頃には、移動性高気圧におおわれて東北太平洋側では晴れの日もあった。24 日には日本海を進んできた低気圧が急速に発達しながら津軽海峡付近を通過し、東北各地で大荒れの天気となり、列車の運休や航空機の欠航などの影響が出た。

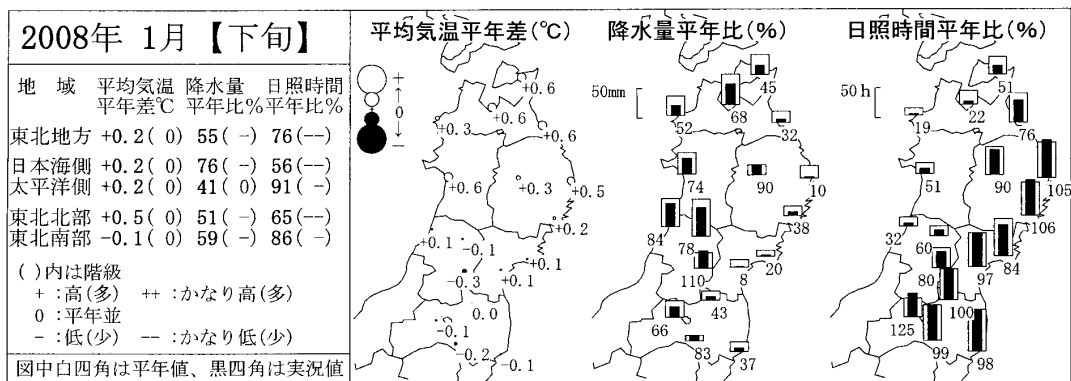
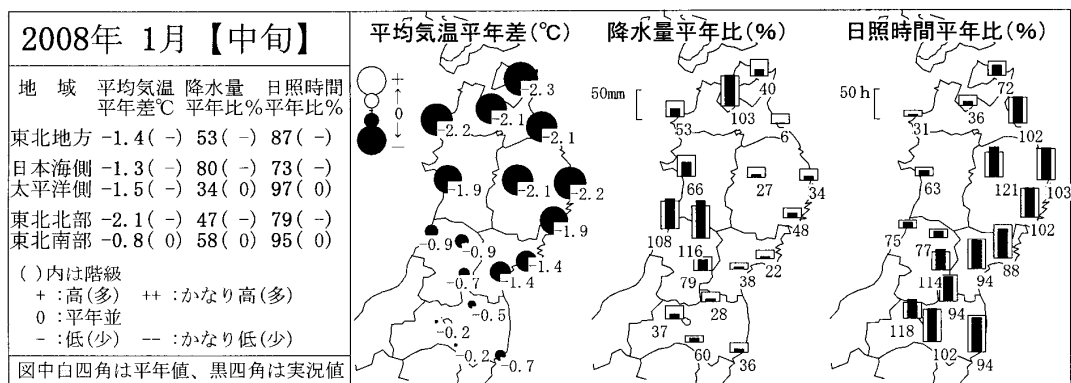
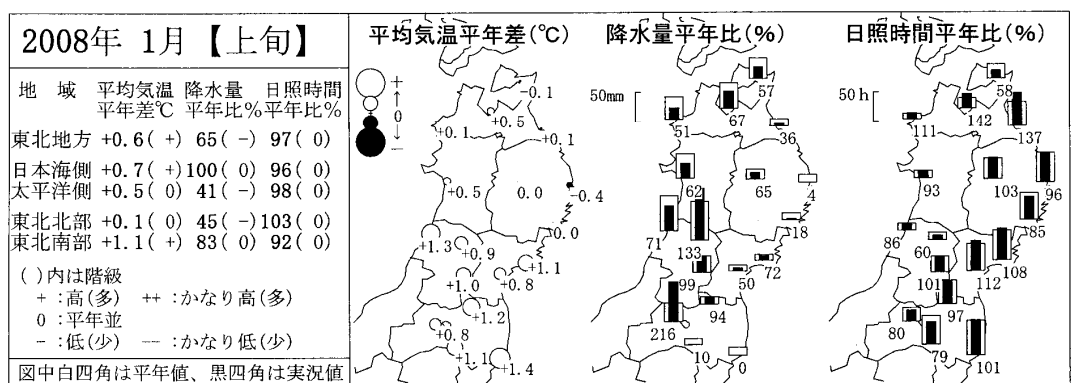
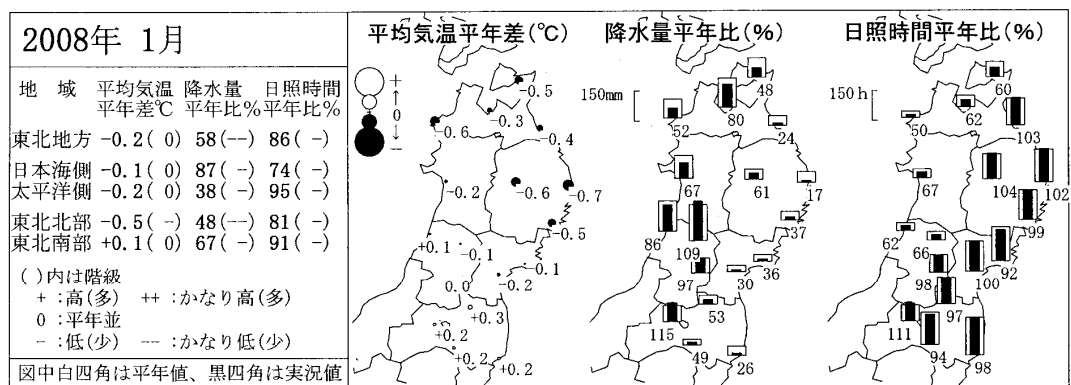
平均気温は東北地方で平年並。降水量は東北日本海側で少なく、東北太平洋側で平年並。日照時間は東北日本海側でかなり少なく、東北太平洋側で少ない。

注) 気候統計値は、東北地方にある 17 地点の气象台、測候所、特別地域気象観測所の観測値より求めています。細分地域については 2 ページ目脚注を参照して下さい。

平年値の統計期間は 1971-2000 年です。階級区分については、3 ページ目脚注 2 を参照して下さい。

本件に関する問い合わせ先：仙台管区气象台技術部気候・調査課統計係（電話：022-297-8110）

(3) 2008年1月の月・旬平均(合計)値の平年差(比)



平年値の統計期間は1971～2000年。

注1) 細分地域

東北日本海側：青森県津軽、秋田県、山形県、福島県会津

東北太平洋側：青森県下北・三八上北、岩手県、宮城県、福島県中通り・浜通り

東北北部：青森県、秋田県、岩手県

東北南部：宮城県、山形県、福島県

(4) 2008 年 1 月の月気候表

地 点 名	平均気温(平年差) 階級			降水量(平年比)階級			降水日数			日照時間(平年比) 階級			降雪深さ(平年値)階級			最深積雪(平年値)階級		
	(°C)	(°C)		(mm)	(%)		≥1mm			(h)	(%)		(cm)	(cm)		(cm)	(cm)	
青 森	-1.7	(-0.3)	○	115.5	(80)	—	17			35.4	(62)	—	179	(250)	—	70	(86)	—
深 浦	-1.0	(-0.6)	—	50.5	(52)	—*	16			15.8	(50)	—*	75	(123)	—*	22	(31)	○
む つ	-2.1	(-0.5)	—	46.0	(48)	—*	12			46.2	(60)	—*	115	(175)	—*	21	(47)	—*
八 戸	-1.6	(-0.4)	○	11.5	(24)	—	7			138.9	(103)	○	41	(95)	—*	9]	(18)	
(統計日数:29)																		
秋 田	-0.3	(-0.2)	○	77.0	(67)	—	23			30.0	(67)	—	147	(142)	○	25)	(31)	○
盛 岡	-2.7	(-0.6)	—	31.0	(61)	—	7			129.1	(104)	○	59)	(106)	—*	38)	(27)	+
大 船 渡	0.2	(-0.5)	—	16.0	(37)	—	4			146.7	(99)	○	2	(23)	—*	2	(7)	—*
宮 古	-0.5	(-0.7)	—	9.0	(17)	—	2			166.4	(102)	○	2	(43)	—*	1	(12)	—*
仙 台	1.3	(-0.2)	○	10.0	(30)	—	3			151.9	(100)	○	3	(29)	—*	2	(11)	—*
石 巻	0.4	(-0.1)	○	12.0	(36)	—	3			154.6	(92)	—	1	(13)	—*	1	(8)	—*
山 形	-0.5	(0.0)	○	73.0	(97)	○	14			87.7	(98)	○	106	(163)	—	34	(37)	○
新 庄	-1.4	(-0.1)	○	198.0	(109)	○	25			28.4	(66)	—*	278	(283)	○	89	(97)	○
酒 田	1.6	(+0.1)	○	131.5	(86)	○	26			24.8	(62)	—	109	(138)	—	32	(27)	○
福 島	1.7	(+0.3)	○	23.0	(53)	—	5			132.8	(97)	○	32	(86)	—*	10	(18)	—
若 松	-0.5	(+0.2)	○	93.0	(115)	+	14			89.4	(111)	+	78	(185)	—*	69	(44)	+
白 河	0.4	(+0.2)	○	15.0	(49)	—	3			151.9	(94)	—	16	(58)	—*	8	(14)	—
小 名 浜	3.8	(+0.2)	○	12.0	(26)	—	3			185.0	(98)	○	0	(5)	—	—	(3)	—*

(注) 1. 平年値は1971～2000年の資料から求めた。

2. 「階級」の記号の意味は以下のとおり。

+:高い(多い) ○:平年並 -:低い(少ない)

各階級の区分値は、1971～2000年における30年間の観測値をもとに、これらが等しい割合で各階級に振り分けられる(各階級が10個ずつになる)ように決めた。

また、値が1971～2000年の観測値の上位または下位10%に相当する場合には階級の「+」に*を付加した。この場合には

かなり高い(多い) かなり低い(少ない)

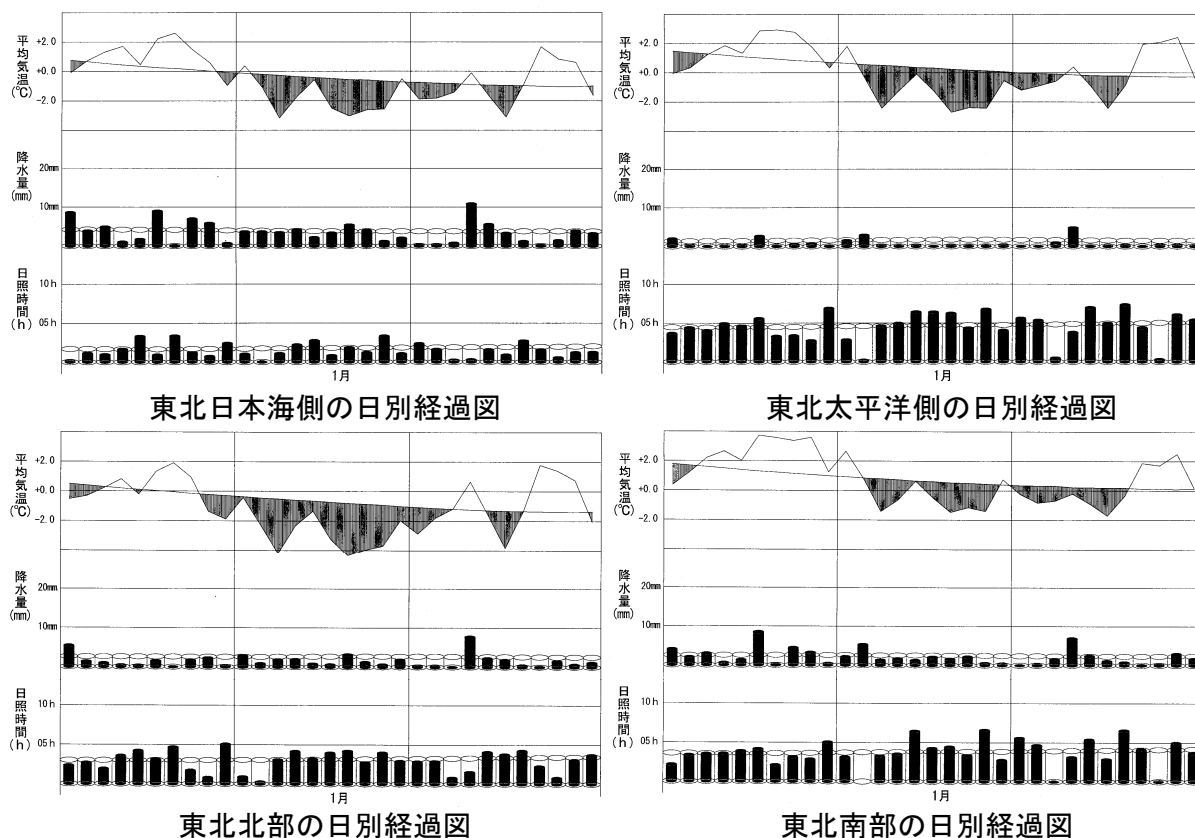
と表現できる。

また「降雪の深さ」と「最深積雪」の「階級」は平年値が「1cm」以上の場合のみ表示した。

3. 値の横に「)」や「]」がある場合には、月別値を求める際に使用したデータ(日別値)に欠測等が含まれていることを示す。「)」付きの値(準完全値)は通常のものと同様に扱うことができるが「]」付きの値(資料不足値)については、値の下に記載した統計日数(統計に用いた、品質が十分な日別値の数)を参考にして、品質を確かめてから使用されたい。

なお、日別値がすべて欠測のため値が求められない場合は「×」とした。

(5) 2008 年 1 月の日別経過図



気象官署の日別観測値と日別平年値の地域平均（気温：実線と点線、降水量・日照時間：黒い円柱と白抜き円柱）

(6) 2008 年 1 月の極値・順位の更新

※順位の更新はタイ記録も含んでいる。タイ記録は「=」で表す。

月平均気温高い方からの順位更新

3 位以内はなし

月平均気温低い方からの順位更新

3 位以内はなし

月降水量多い方からの順位更新

3 位以内はなし

月降水量少ない方からの順位更新

順位	地点名	降水量 mm	平年比 %	これまでの最小 mm (西暦年)	開始年	平年値 mm
3	深浦	50.5	52	47.0 (1983)	1940	96.9

月間日照時間多い方からの順位更新

3 位以内はなし

月間日照時間少ない方からの順位更新

順位	地点名	日照時間 h	平年比 %	これまでの最小 h (西暦年)	開始年	平年値 h
1	むつ	46.2	60	47.0 (1988)	1935	77.0

降雪の深さ月合計値多い方からの順位更新

3位以内はなし

月最深積雪大きい方からの順位更新

3位以内はなし

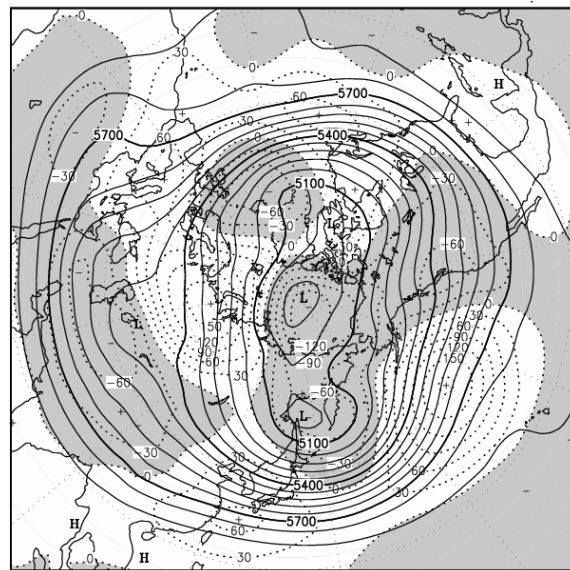
(注) 値の横に「」がある場合には、月別値を求める際に使用したデータ（日別値）に欠測等、統計に用いなかった値が含まれている（資料不足値）。順位は更新順位以上になることは確実であるが、統計値の使用に際しては気候表に記載した統計日数を参照されたい。

平年値とは 1971～2000 年の 30 年間の値を平均したものである。

(7) 2008 年 1 月の循環場の特徴

北極海は負偏差で、極の寒気の一部は、大西洋北部、北米大陸西部、オホーツク海付近に南下した。一方、ロシア西部には顕著な正偏差域が見られ、中旬以降のシベリア高気圧の発達に対応している。

日本付近は、中国東部から本州付近にかけて正偏差、北海道の東海上を中心に負偏差となり、北日本を中心に寒気の影響を受けやすかった。また、日本付近は南北の気温差が大きく、南海上は前線帯となり、低気圧が周期的に本州南岸を通過した。



2008 年 1 月の平均 500hPa 高度

実線は等高度線：60m 毎、点線は偏差：30m 毎
陰影部は負偏差（寒気に対応）